紙燭要略抄 巻八

欠
190
8

へ13
190
8

於
190
8

絲櫻春蝶奇縁巻之八

東都　曲亭馬琴編述

第十二段

洞房ふ新郎を走る次殺風景
忍沼ゑ光棍を剿さ震雷電

識らぬハ郎ら共ぞあしおゝハ別のさゞ波ゝ浪ゝそゝひまゝゝ糸の。素ゑの
末いゝ浮ゝ浮ゝされバ阿絃ハ。ふも。あゝで狭七と婚姻を。ゆゝやくにゝけゝ引ゝつ。繋ゝり
あげて化粧ゝて脱更る衣ハ煩悩の垢ゝぞゝしゝき白小袖。眞土へ晴衣とゝゝゝぞハ。
佛を憑無垢世界西ゝゝゝハ秋のゝきゝゝゝう悪ゝさもいやゝゝゝハ。今青淵ゝゝゝ家の
引ふ結ぶ縁ゝと孺子の帶。ゝぞゝ歎ふゝゝ且て虎溝のそゝゝ焼魚上を下へと
ゝゝゝゝる千兵衛ゝゝゝ科理ゝ豆腐ゝ並る碗打敷ゝとゝ陝ゝゝゝ中へ背家の
家ゝふ小ゝゝゝふ催ゝゝゝゝる高笑ひ追後口ゝ貫ゝく。物ゝゝふ涸ゝゝ千兵衛ハ

立ぬぐ〻り旦開が耳ふ口紙さしらせ初俄頃ある婚姻ゐんが飲食ふよも家のうち
だろう賓ざねゐるけるとも盃の献酬ふ此二そころ弱あるぐさをいとむ〻つけき
家とたちふ的を執せんハ役ゐるべ曩さゐん分ふ密落ろ小糸ようづ膳
閑て挙動も正直し今青の的ふ彼女ふ俄ぐ母ろふしゐん分ぐろいふ
ぞや。と問が旦開そうち点沢そハ一段のつふ付り綱五郎ハ公の底を明く地よ
告り我せ孫より中商人の経営ぶうるさくとも里ふ由緒ある親の蹟をのろれ
化人ようせんとて狡七を阿總よろうあんしつりなくいそぐ婚姻ハ此彼ふ情由
ゐるぐやハやるめぐられ打ち我ようけ小糸と母らんを戻びようて吾倚も
ろる人ようり時宜ようぐ綱五郎ふ。ろふ紙篇ふ訊孫。ぐちいろゐ女子
なるぐ直さ問めて今青ようり。彼人の女房といろるれハ二夫婦後くて電ぐ
ろうち門も独るが先祖へ孝雑ぐれはようぐ付るじ。ろ戻ゐと信ようて。

いそぶされつ十兵衛ハゐのぐ宿所へ走り去て獲て小糸をゐそまれば旦開ぐ
燈燭さ向て浮ろ近く招ぐ。ろ〻くとんて栞ふと笑ぐ。ほる縹致の
愛さぐ母ふぶ許阿孫ふ紛る赤あり。今青ぐ。ぐあひ付る。綱五郎が
姨旦開と名乗ぐも大ろハ強て家ぐ住ゐん一樹の蔭も他生の縁ぐろ
くるるくろひ付ろうひくてとも婚姻の盃を納るくよぐ使ぐ。と叮嚀ふ。
ゐ人ようゐるけれども腹さしさふ恋ハゐるぐ塞る胸ふ禁ゐへね涙の両の竜
やどろさ俯て泣てろ。ぐて座席ハ燈燭の花ふ咲ぐふ新郎の狡七ぐ衣裳
整つ泣新ぐ〻く向ひ付る。阿總ハ今青形婦の花とハ妻時名のぐて公の
底ハ深山木のゐえぬ操ようもるく。香もなろ人とあるろふ稚枝をゐろ
結びとゐ綱五郎ハ布子のうへふ縹紬上下ろけて肩のぐ折目高胡坐ゐよく
る〻ぐ上坐ゐ旦開ハ冬の姥櫻ゐて花とハてる偉言の禁字の祚ゐ月ふ鄰る

菊月五つの日長紀とめ」よ秋の夜を千代のもとめと祝ふ。十五夜い遠ざかる。
片袴釋捨て。袴の帯紐結びあ」ど。旦角ぶ儒を坐をトまべ。綱五郎を聘
組直。祢宜も酒を阿爺ひとり。今宵は特ふ労ーて。壮夜ふが闘諍の裁
判中る尾ふとる盃の献酬とい格別る。式作法あるべけまど。月もあるい徒
さ」ぶ」阿爺よ姨ぴよ形のごく。彼ホ盃さーてとぶ。といへば旦角いうちわう
笑ま。婚姻の盃い女子ぶ。めて男子ふ献といふよりい雑もまれど。吾儒ありとて
よくいちぶ。さられ他人をおぶそる。晴ゆるる席ゆゆふど家の内のまるる祝宴
ふい。ちぶ。ちぶ。ちぶ

つる五郎
あつけ
おんな
十吾閣
櫻七
綱五郎
義を伐て
大總を挟もま
妻を
小さと

双添二艘の入船繋ぎ留る。陰陽和合の大港。桃子いろふと手をひら巨。彼首
是首と月ゐ耳ゐ十五周ハ小膝をとゝめ。その桃子ゑハ謂あり今宵とゆて今朝
猛ふ云ひ起せーとゝるれバ里老ども振待せど前面三軒合壁も後日のとゝろ
ちゝして物ひとつ儲ハせ程ど酌執る女子ハ催ふゝろ。待女郎ゐり。双添ゑ二扮三扮を
程て委ー。旦ゝく来ゐ〳〵ゝく来ませと呼ゝろ是バ恋と一声回答てゐ。ゐ
ゝち難てふ柴の煙ゝ胸ふ焼野の雑子。牡ゐゐ子ゑ焦ゝと六人よいゐれぬ
岩田帯。ゝぐ結バ程ど三月子の雛さ〳〵腹よあるゐの沢酌ふ立て芝ゝんはゝふ。
妻をゆさゝねる夫も夫ゐぶ物臭ゝよひけゝゝゝ。仇ー女子ゑ面ふゝ。夏の顛末うち
あゝして狐ゑ巳して熱腸を冷ん。とハゐ〳〵ども如此ーそハ。狭五郎ぬ一の為ゐゝ。
こゝらゝ〳〵と紀ゝも。鄙よ良人ゑ言ゐゝて。説諭ーゆひゝる。今宵のとを
仂ゐゝいひ破れぬ蒸襖。ゝちあけられど青よゐゝのゝまゝ〳〵ゝ程ゝてゆう

ゆゝふ気を起ゝゝ引揺ゝる。桃子の瀆ハ火とゐゐれ水ゐゝさゝと契ゝゝる良人の
こゝろゝゝゝて塩焼蛋ふあゝ程ども。芹ゝ死海ゝゝゝ騒ぐ波風を手推漠め。
紙門の裏ゝ入りゝゝ狭七ゝゝゝゐゐ綱五郎も。ゐひゝゝ程ゑ目を注ーゐる
便ゐゝと咳げバ日開ゝ業ゑゝゝゝ笑てゐゐ程ゝ矣ゝ阿總ゐ。狭七ゐゐゝ
若ゝゝ死。彼子ゑ名ゝゝゑ小ゐゝと呼ゝて。綱五郎ふ由緑の人と謙て呼ーゑ
吾儕ゝゝふ面ゐゝ世ハ今宵のゐ四五日前ゝゝ背戸の兄十五周ぬーの宿
所よゝゝといハ十兵衛ゐゝゝふ扇を磨ゝゝ直ー小糸ゝゝゝゝ
物ゝゝゐゐ。情由もゐゝゝゐ。平ゑゑ問ゐ程ゝゝれゝふ
ゝゝねど檀那刀添ふ由緑の人とゐゐゝ大ゝゝ猜ーもせん。今宵の酌ふ
催ひゝハこの盃の数ゐて。類せんとゝハゝ。ゝゝ女子ハ女子どゝハて阿緑ハ
め紙ゐ〳〵縦ひとゝふゝとゝ。ゝゝゝゝ桐潭ハ実の妨ゐ。妹ふゐゝて送ー

漲かくんまろ人よるくのくといられて阿總いうえとよ。顰めてもりえ眉を揚。
背戸の小父公よ矛をよーもん人とー咬けが小柴垣伝ふ隅の伝ふべさ。ひふを總と
呼ま伝ふ。忘ひうけるえ人さ。よ催ま。そ水ありふ。ひと憚ふたべるふ。といへ小糸ハ
又さふ妬の火焔塔ふ移て。眦ふ。と頸を撞。ひつあ。おと新婦ひあ。言塚ふよ色
香紙含ーて。紙の底ハ鬼薊。化の雄窠をふ物貞よ。今毛根締の床元雅。
ゆふが中へ水さーて。幾代の春を契るとも。ひつふ。ふ栄べえ。さハ伝ふをや。とのひ
かけて。夫のかく紙ふ人ふ。ま。狭七ハいで胸ふ。ふ。
面をおハ。小糸が紙ハ情郎の綱五郎をさーおえて。横あうせるる婚姻をけ。ふう
ちふ友よこそと推量るのそ弱もいつど。況や律の本末をふ。ふ阿總ハ沈吟じ。
背戸の小父公がこの盃よ類ま。と宣ひ。を紙よ。けて。迷く狄釋ども釋ぬ化むを。仇
る緑ーを化人よ羨ま。ハ紙ふ。そるふ。ふ。ふ。夫がありやるえ。やーふ

ちふねど人ちれど物をふ。ふ。ふ。ふ。と。努ふ。ひ伝ふど。とひふ。ふ。ふ。
述懐の彈をちふねびいとじて。小糸ハ咬くふるも塚ど。ふ。ふよ夫のあふ色をふる
といいでいふ。ぎ九ッの尾をふる狐よ魅られる人もあふ。そをちふも憑ーげふ。ひ
ーふ。ふる人もあふ。ぴふ。ふるふ。ぎふ。ふれどふふ物ふ。飽もせど。飽ま。ふ中を裂れ
ふ。若ーえ胸を雅ふ。ちふ。ん。ぴふ。ふ。ふ。疼ふ。蔑ふ伝ふ。十の指を切ふ。とも。桃子ふ。
ふ。ぴ。酌ふ。ハ立ど。汗ーふ。ど。ひふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。伏沈めど。阿總ハ直と呆ま果
狭七ハ傷痛けまど慰ふ移て嘆息。十兵衛旦閑ふ。奥さふ。ぞ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ

阿德も意ゆかぬふ。彼はさりく痼疾ゆく幾さめとる月もあらう。小糸もこゝふ
ゐせよ。初めは湾るふ似うれど。やみ田不町ふ俠者は多し。俠者の中で只ひとり。
俠者とのつく綱五郎が一旦ひとつ言葉は金石今こそあれ後くは三人四人が眠しく。
彼ゆさうたる世よ生さん。とうゆう似ど淺えうり。姨ぴよ彼とびうちもしく。とく
盃をと捶とうて。阿德が用とうふ推居れば。旦開てゆうで息を吻た。ぬん牙あい生も
せで。小糸紙こへ居るを腹さてるくは理あれどこと彼知は間近ろ。ぬん牙が竊ふ
ゐて来さる。女つゆと雇ゆまゆざるべさ。情由あるよ知ゆるゆるとゆいせもあ（む
声を振り立益る死と紙宜ふる。水上清き玉川の玉のと水ふ産湯して。牙の慍
廣き男子一疋荏土ひさえの名ふ員てゆえと深く成綱五郎が。ぬぎあをゆぬ
ゆいとる。姨ぴはとまれゆくもあれ。阿爺ふ似ば。ぬいぬびひみ。とうあふ教圍ぶ。
十兵衛冗さる死を廢ゆ。ぬゆまゆ。ぬゆまるおのが悞ゆう。猛ふゆひうとおりて。莖洛のくさへ

ぬ〜とゆひ放てゆ日来の偏意地ゆひう（さぬぬん牙が足を繋ぎ留ゆ情由あう
げゆる。小糸まま死めあるべうぶ。と先へ潜りし藏の溝通ととゆゆとゆうゆ僻
事。彼女子ふ殆ゆ。十兵衛ぶ面ふ覩て。伺ゆるも宣ふ。ゆうでおさゆる四海浪
枝をゆるくさね相生の枝ゆそゆで愛ゆけれ宴さめぶ。ぬく。と挑子とゆうくさ
つくゆ豆が旦開ゆうとゆる盃を受る阿德ゆ今更ふ殊火を握る死ゆう飲ゆうふて
ゆるも飲ゆどゆぶゆう下ふ閣ぶ。秋七も竟ふ推辞ゆるどゆうあぐゆる盃のゆぶゆう
ぬ三三九度ゆやくふ夏果ゆぶ。綱五郎ゆ盃をゆう納つ後方ふゆん生ゆうゆれ彼ふ時
うつゆて。初夜ゆ七ゆ夜ゆ。ぬゆん。秋の月の短ゆふ。ゆいゆぶのゆせゆれて。秋七ふゆゆ
疲労けめ。庖温のゆゆ阿爺姨ぴゆ。ゆうゆゆゆれば。阿德もゆゆ〜臥ゆ。
吾儕ゆ又帝ゆうえて阿爺と鄭ゆて一献酌ん。とゆゆ十兵衛ゆうち点沢（現媒
妁ゆ甲夜の役狩七も阿德も衣服ゆうゆく。寝ゆうゆゆ。とゆゆぶゆゆゆゆ不〜ゆう

かゝる浦島殿しゆくぬ床の海ぶろに數さふ屋ゝ移て。手次の間へ退けば豆腐ハ
俵とうんかつく。ある痛ゝやうち絲ま。て。雑も小糸まめ紙くけどいくふ疼ハ理
ちり欲ちん身ふハ潤ふ間上もあくらふ〜おうぐうう傷てのこぬるぐ風ひく
へ死よと正首ま雲時背をうん捻り。誘ゆ。ゆくとそゆをそうつ。ゝる隨ま身を起せど。
袖とるされね紅涙庭の楓樹と深あゝど。夫のゑ者ゝ糸の。素れあゝる中暖簾
腰ま搦る母子草。母ハ女児とつもちゝぐ子ハ又犯をちゝ土の壁をちからふ
ちらふなく。伴るくぞ哀まるゝ。ゝる程ま阿總狭七ハ。ゝうふ落ね色るゆ。衣を
ちゝつゝうち共ま臥房ま入るゆのゝら。阿總ハいまゝ臥ゆせど題襟まさ〜入まゝ。
霧間ゝふるゆ紬の両ふる里のる犯の事。夫のうゝをちひる夫ハこゝまあるゝぐ。
ちゝゝどちゝれゝど今ゝまゝ八重猪ある妹と伏の緑を恨ゝびゝらふ祢ゆゝ紐ゝや
おゆゆふ。狭七ハ枕一ゝゝてひゝう臥ても睡ふれゝどゝゝうふゆる小糸ゝゝとてもかく

ても所容ゝとつゝ身をゝてまゆゝゝ。ゝゝかくまで武運竭されば速ま宿願を果さと
べうもあゝざるふ一文字の羽織のるハ。銚妹九ふうち任一圓塚山の麓ま追捕の
武士を敷ゝる。罪犯を身ふ員て死るゝ。ゝ受る恩ふも背ゝ此ニを孤をまるゆのと。
ゝゝゝ人もゝふべ。さるゝてもこのゝ紙小ふまゆ苦ゝゝ。苦ゝゝいゝく恨やせん。秋一
後るゝ空蟬の裳脱てこゝ紙生ゝふも。覇とるゝ小糸ゝ。紙護ゝハ阿總ゝ。謀まゝ
ちゝゝ。と涙命ゝつ。彼ゝゝゝを一ゝゝやゝそ。横ゝいゝゝつ首を撞阿総ハるゝて臥一
ゆゝゝね。ゝゝゆゝう嫌るゝ。ゝちゝゝるふゝゝ絲ゝも否ゝゝゝゝ主命ゝま空結ゆる
緑の糸。出雲ゝの祢の過失るゝん。ちゝゝとゝ。たゝゝ男子と生ゝゝゝ。情由
るゝ妻ま嫌ゝゝ。一ゝ夜もゝゝまゝゝ。米糠三合貯緑あゝゝ入婿ふる。なゝ
そゝゝふ。世の常言ふゝまゝる。苦ゝゝちの。ゝ胸裏をゝゝゝゝゝゝゝ
あゝゝて臥ゆ枕ちゝゝ虫の声。更闌る隨肌寒ゝ秋の夜ま。ゝ夜も被げゝ

ひくべきふと腕を伸してやをうしく袖を振り拂ひて月を拭ひ夫とする婦とある。
皆是神の形為るべいぞろ人を恐むべき況うれたる公りてあの夫のうゑ[illegible]ふ。
つれて強顔物をるとうまんハ祇〻ぺ。ぺとて悲〻く待るし。色むよあまる袖の春
果敢るれうハ墓るれハこの身ひとうふとめさる。縁故こそ若くけれぺぶハやハ
稚きとうこ云号くる夫あつ。その夫ハ捨られても。操ハうえぬ雪の松子の月乃
春ふあつでハ引る袖を墨染ふ染て浮世のごとうり尼とるべくとひる宿願ハ
えも遠ざ意よ脱ま為今春のことつれるれるめハ今るり己エ祇ろど婚姻乃。
盃ハむひーうど穏て覚れハ究めとうぺ。ハうんもん身が妻るべ。ふこざ過世の
仇るりけん偽るれ心操を貞今ふ[illegible]待るべ。南無阿弥陀仏と唱もあ〻ど。
准彼やあとうけん油力半ふ〻くしる刀子を抜れ出て吭ふ突立んとすしるべ。
独七ハ岸破と身を起て吐嗟とそろう推り留め。玉とふとも金とふとも命ハ

ふくる貨とるるれよ死んとすでとふる。縦道理ふ稱ふとも。ぺれ又んつ殺さんや。
まづこの刃を放ま〻ぺふく放さ〻。死〻てくべと手ふ声もたく〻ふ。外へのくるる
屏風の背ふ小糸ハ姫腹ふ〻と窮ぜバ阿總ガ泣声。独七も共ふひそめくのこ。
いふよ〻定るる祢ども。笑くふ泣くこんどもふ。茶墓を徹とうち落。頻ふ
屏風を敲くまぞ。独七ハやうやく刀子を奪ひとるつ外面へ跳ぶ出れバ倒ふ。
屏風ふ紙燭うち喊〻つ。黒白るれ暗夜を微伸ふ背門ふ。縋て脱ふ出れ。
夫ハ三輪の祢るふ祢ども。跡ふ[illegible]る草環の小糸も共ふ一町あまる。揃〻
走るつ。辛〻く秋を引留やふ手ふ[illegible]ぺ。ぺとあつ。平ふあふね今春の夫景
ぺん身ハ刃ふふ[illegible]ふ。何れふで走るつ。同ふて独七ハ後方をんぺつ。
原来小糸ハいちえ〻ぺ。ぺづ跡跟て来しるこハ便ふ。と野干玉の烏夜〻
停立嘆息〻。ところあ〻ぺて甲夜ふ阿総と臥房ふ入る。ぺとぺ彼女子ガ

心操を怪くるふ彼あの既に夫あり。いれも又婦人あれど。狭七が沢いろぞ忘れぎさ。
夫の為ふ情を述。自殺せんとすれども。やく〳〵ふ推禁め。刃を奪ひ取こうる。
その乃子の則芝ゑう。武運微く勢竭るつ且愁ふ存命とも。思平とゑんを
怨ゑべ一文字の陣羽織をとり復とぐきとそ。ちとべとそ彩りて。赤屋
ゆへ身をとせげど。そもゆくても死とべきゑ子。蘿蔔丸が罪よりよバ。綱五郎も又
吾僑ふ代て。彼陣羽織をとり復。鎌倉へ進。ちんゆ子ハらう難苦ふ堪
憂を忍びて自を愛。腹ゑる児を安らくふ。産て養育まゆつ。又慰るよも
あらうん。をよう直ふ赤屋へ帰りて。これらのよう沢密やふ。蘿蔔丸ふ告ゆ。甲夜
ふとれ。一件を書遺。彼人の不の整へさ。人且て死されば。此彼竟ふ狩合せん。
ゆくるとゆそぐつ。道次ふ中死ゆつ。ゆる小鞆を逆ゆふ把て。肚を切らんと。
なりしゑぶ。糸ハよくと泣あゑど。夫の巻を楚と引ゆ形るゑ子をとらえて。死んと

ゑひ決めるふ。理ふ似く理ゑふば。死とべうせべつふこそ。ちん子が為ふ縁金ゆく。
あゑゆ〳〵怒るべうしを。姉ゆ前の縁ふ連ふ助られるのをなうぞ。りゑ。苦ふ世ゑ
草。結ぶ縁〳〵の娘〳〵も。婦と成ふ夫と弄眉憂をきゑらふ腸を断だうちゆる
旅宿〳〵。逃かゑるゆ一文字の陣羽織を索移ゆて。子のぬれ衣ゆ後竟ふ左義
ふ乾ん為ゆふぞや。然る沢女とし〳〵患苦ふ迫りて。志を弱ゆ果さば。獲ゑ紀
衣を彼ふ任て。死て忠義ふゆるよ。あうや。形のうるがうれさゑて。狭刃ハ鞘ある
乃死ふこゑ新婦ゆ前の小鞆ふとそ。られりて死んと思ひのゆ。彼紀ふ公のとうく狭
そゑ情ふ〳〵別ゆ。と恨つ泣つゆ口説き。引ゆ為る巻のうゑよ。なぞゑる涙の玉霰あゆ
音高ゆ。とふを放べゆん子が練言説ゆそ好。存命てゆ彩ふ背く。孤を忍ぶゆ。
が役何の里ゆ子を躾ゆ。蘿蔔丸の消息を定て後ふゆ。なうんと
思べゆうゆせゆ。婚ゆ後ゆの烏夜てそうゆ。逐ふ瓜向ふ子を躾さんとゆふる

小糸はうち点頭。さてこそ吹こえたるひゝ狩。欲しゝやとゝろ〳〵文。詐欺るゝと
のゝやとゝろひそのこせぶるゝふまづその刃を放ゝとゝひろ〳〵小鞆を奪ひとり。
懐紙へ引包こゝ。帯の間へさゝ夾む狩。狩七八忍ゝ推禁めゝて由疑ふ流石ゝ
女子刃を奪ふこゝやいあ。ゝりとゝゝ〳〵ひゝわゞ〳〵が懐ゝる祇物ふ包こゝゝゝ
持ゝとゝゝ。そゞゝゝゝゝそゝはいゝと危ゝ。ゝゝこの内へと懐中ゝゝゝさゝ入ゝてゝゝゝ出ゝゝ。
祇包の結目は解ゝゝこの内ゝゝゝゝ人の戒名も納てあり。主君の矢の根もあゝ
ゝゞ〳〵小草が像見の扇はゝ。伝知ゝゝる遺ゝけんいと惜ゝゝとゝそけゝと探ゝ永
祇は如法夜の蓋ゝもゝゝゝゝ立在ゝ。燈覆引ゝ掲ゝる人駿ゝる望者ゝ。
小糸は吐嗟と夫の袖を引ば狩七も〳〵ゝゝゝゝ。夫婦送ゝ密語つ。このゝゝゝゝ
細五郎が雙ゝゝゝゝ

おさけ
十吉郎

大徳
死を
決して狭七
よ様を
おふさ
狭七
ふさと

奮撃突戰して
綱五郎肩口を
脱る

こよなき犯罪を犯しつゝ。脱まとゝとまりつゝも。今更命を惜むあまり彼陣
羽織をとり復して。秩七ざふ世より出さべ彼も又恩義ふ仗て。阿總がうへ
るゝ。姨阿都の久陵まぐいつゝ。鹿畢ふ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]

隕さぶらん牙のうを悉る。狹七も腹てうあぶ。この鄭ハ安穩るんどれろ外ま
術もな。吾僑ま寸ろしもひ祓。とのへバ綱五郎沢を掉。阿爺が義心ハ牙ふ寸ろく。
感謝ま場ど。ちろハあれど。ぎ寸仗て命を軽ド。人の爲ふ牙を絮て悔ーとせざ氣
綱五郎ど。のーくハ阿爺を芳狗ゆて。一ヂ日さろとも阿容さと助るう沢祈ぶき。
狹七ぐてのハ易ま。いゆる比管領ろ。彼一文字の陣羽織を索祓て進じるバ。
罪あるものもその罪を赦さんと令させるひぬ。ゆれが且くろぶ牙を森ーて黒平が
所在を索祓。件の羽織をろ復ーて。狹七ふ遍与さバ彼ぶうへふ恙るの沢のこるのぶ。
孫倉へ召ろへされて。忽ちま渡跡るんさぶ。その縁ま連す。姨阿總ホもろふるすん。
僥倖のるのうどやハ穿鑿ろど牙ふ召ぶ。間ま影を暗ー。迹を理め。陣羽織をろ
復さぐハ死ーて俠者とのうくうな。暇ま。ろと後方るの。戸棚を礙とう開て。
鮫鞘の中刀をうひろつくれや牙を起せバ。ゆよ等まのハと十兵衛ハ祓ろ遮り留る

ゆど。旦両ハ秩ま携ろ著。ゆうやーふ摧屋つ。脱ま。ーと浮ん弱ーて。その母ま
ぐまふ人の爲を。ろふ信ハ壮士の日本魂るぐけれど猛さも夏ふ。ろるぐそ。ま径ま
いどうが主阿總ハ。ちろぐどろぶう。ふるれ恩ある人の子を教ーて後ま管領乃。
江内の武士の姑とのうくも何ろハせん死んとのふハ恩義の侵代らんとのうひろの
兄いづまをいづれとうえがさた。この牙ひろの胸の苦ーさ。些ハどひろ。小糸を
何れまるゆんどーるて留ろと声立て。ぼふよ母まど。憚ろのぜれ。ぐるぐろ
哽ろんれば。十兵衛も鼻ろうちろも。夏をつけくるん牙ぶ俠氣ろるくハ
禁め祓ど。必死を決てるどて又小糸を誘ひ。ーのひ。言と釈ひとるみ。ぐ。
今ゆ。いづまの命ろて。彼女子を変ーてのふと結ま。て。完然ーと笑ーも。阿爺
姨ハふ疑ま。痛ろね腹を探ーるくハ揺るれたーとふこそ。彼小糸ハ。のうんとろ。
言葉の腰打る阿總ぶ。沢声狹七ゆを逐ーてそ。問ーあろと。叫びつ。奥ろ

をそ〻ぎ。三人舞一うち驚きさわぐその声を汎まべ。阿絵ハ涙をおし拭ひ。
匿とされど秘しやすいかゐ釈と釈が云号しる夫の。困隔まべあひもせど。
みんもせねるふ巣られえど一旦夫と定めつる。操さられるふ破じとおひ
ゑよ他人と婚縁を結べ〻とそそれとハ生ぎ推辞うども。脱まるさて拝ぎと。
ひとり臥房ふ入るのるら。隠て見ん狂ハ究めるう。彩夫が婚縁の鵜よ賜し
刀子ハ家正が他とやゑん。小鞆よ金の胡蝶あり。艱苦の中ふ失いぎ。せめて夫の
紀念ゐる。双ふ伏して死ぬやと。件の小鞆を接ぎて自害をんとおもひしよ。狭七
ぬるよ禁められ。双を奪ひさられる。夏の蠶擾ふ扇風を倒し。行燈さえうち
滅るつ。かの人ゑそぶ俗よ。晴ぬよ紛れ小ゑ釈ゐて。背門ゆう走るのひき。
いるんるゑ双を取られるべ。死んとするふ行るも死まぎど。其ゑれ。是着うと。掻拐れ。
さ行るよ當ゐハ刀子ゐるで。物よ包ま〻扇ゐるう。こハ紛れとおひつ。臥房を出て次の

間ゐる。掛燈蓋ふゆうそゑれど。舊里ふあるしと死男の懇望辞ひるるぺるふが
をさゐの紀華ゐるら。古歌を書写て。贈る扇ゐるう。この扇をゆてる人外ゑまる
あるぶるも付るるど。人ゑ夫ゐハ狭七ぬ。ハ云号の夫ゐるうけん面教ゐ行べ向も
せどぺるふがるんも苦ぶるし。遺憾さハ百夜ゐる。榻の揺揺ゆれ口説とも。言葉ま
いるで尽さるべさ。件の扇ハ云ふあるうといひつ、猶ても一角けべ。会ゐるうとも一
これをんでいせの海の玉ゐる浪よ。さるぶるひ。やひある浦の春をそそゆて。原永
狭七ハ夫の為ふ云号ゐる夫ゐるし。狭ちぬるとハひるぶるんやくも
小糸をそのし逐電しるが実ゐるのるべ。驚やるぬ夫ゐるうこれるんと。呆れ果
領よ嘆息しるし。綱五郎も嗟嘆るぺ。澄据もやひるる情縁送感も
とひゆるん。夫の舊の名ハ。神原狭五郎といハざるやと。問れて忍死ハを撞
そハいるふしてきられけんと。狂ぶる身声をひそめ。主君の為よ悪名厭べど。

ぬれ衣を被て藤会衆逐電せしよう名を変て狭七といふ神原ふるさと志ゞ
ゝび名告あふ。ようみやりけん痛しといふ阿縁八堀そよくと泣つゝ伏沈べ。
綱五郎ハつゝ。どんやうて又嘆息。現哀れ理アるゝ。狭七がこゝろを推量ま
彼形なれ羽をうゝ。陽て雪彼羽織をとう復とうゝ紙隠。黒平を縋り
るゝ。ひれ代アて死んとて。去り去りしを疑ひ。今又狭七を死しゝ侠者と
いつるゝ。ひもを。遠くゝ。ひもじ追留る。阿縁八疲や疲けん。姉ハ彼を勧り
ゝ。阿爺ハ又門渡て。おのが狭七を招て。ゝ紙ゝ。ゝ。といひもゝ。ゝ又中刀を
さゝとぶけゝ。夏ゝ。別ゝる壮士がゝ。ゝろ鄙の扉戸を。尾ゝ。ゝ。と門内へ。黒白も
別ゝ晴れ夜ゝ。秋風寒く吹入て。両さいつゝ降そゝげゝ。十五夜がこゝろ紙そ。
壁ゝ。けゝる傘をゝんとゝてさゝ。ゝ紙。右ゝ受つ。震をゝ折て。跳アゝ紙
外面ゝ内のゝを編ゝ。小賊ホ六七人。山魅小馬栗ゝ。ゝ。ゝ巻四ゝ

牙を固め。十ゝ早索いゝ。弄くとゝ。ゝ。ゝ。

烈しく吹く夜嵐の音に紛れてそこばくの内にも考ぐらし「が」ぬるるなる
せとの声して人影東のかたへ走り去る。発青ふ。十兵衛が耳を側だそ。ばい今
須さる掘戸を又引開て外面を透し覗むれば。綱五郎が伍平太を。
打捨てとる程よ。迯後まとる。小馬栗微八も。背よ刀を抜そばめ。ばい一刀あと砂ん
ととる。刃の光りふ十兵衛が吐嗟とだろうもふめそる。頭を磔ふ小馬栗が右乃
巻を丁と打。うられて刃を亭哩と落し。怯むを隙そ走り蒐て。項上飛て二三間。
筋斗をうして投退まば。綱五郎が背のかたふ人あり。とらふ。山魅ホを追捨て。
六七歩立りどるを。十兵衛遥ふ透し見て。家公ふ怪我いるるアと欲。さいふ
阿弟ら。十兵衛刀称欲。こが吾僑ようち任し。狭七がる紙。ころ弱ろ。といふ
間ふ小馬栗が。やくふ刃を起し。刀を捨て十兵衛を。砂らんととる紙左へ
外し。足を抱して磯と蹴る。蹴られて仆さび倒る紙。起しも立ど踏尾ろ。ばい

何ぞ。そとおそるく。旦角が裡面ろうさし出と。紙燭の光よりぶ。三人が面を
めりつ。これいとぞう吹入る。風よ紙燭をうち滅され。善悪の烏夜よ降る
雨のあしふ孫しつ綱五郎が狭七が跡を追ふ。ぶとも老さ別且る。

第十二段の下

題目前ふ出ろう

半胸黒平太その夜さり。伍平太微八ホと共よ。糸屋が廓の外面よ立在く。内の
ゆう紙張ふ行よ狭七が小多紙招て走り去る。徘の馬体を霸吏て。忽地イ
ろふゆう。件の狭七が嬢の仇人ろり。小多が原ワが賊物ろう。後今。綱五郎を徒搏よ
さるとも。そが人ふ。怨紙復とのミ。ばれよりて所得ま。山魅小馬栗ホが。綱五郎が教とた
足ふ孫ど管領の兵士よ打扮て。矢庭よ打ち入るりのあくば十ふ九っが。ばい
ニ紙ば伍平太微八よ任し。ばれが狭七を追蒐て。ばが嬢背棋の讐を報ひ。又一ッあ。
小糸を奪ふて物ふせん。這奴ホが往方定ろう孫ど。黒白も別ぬ烏夜なれば。

間道へ走るべうもあらざりけり。一條なる奥街道湯沢鳥越千束村。この外あ
ぶべくぞ。いざや追ん。と尋果て伍平太微八小密語つ。欲あらざらいどで。くれた
夜を物ものせど。糸屋が門より只ひとり。鳥越のくぶ沢ひとつ。喘く追ふ行ふ
暴雨猛ふ降そぞで。雷さへいて鳴たさめ。電閃るく。ゆみよ早れど道
さうあくどろく。して忍の岡。忍の沈の畔まで来けるどいまゞ獲七ホ追も
つゞど。利欲ふ生死を省ざる。癖者のれどもいて疲労ていつふとも紛みけるど。
沈の畔ふいとあつくる。松の幹ふ身を倚りけて要時晴くをゝ。ちがらひの外ふ
時もうつて。遠すの種を偵るべ。暁るふ近ろ。浩知ふ伍平太微八号。徧五郎よ
うち敬され。小賊ホが往方ぶ。ふるまぶ。僅ふ二人辛くて東北を投て走りつ。湯
島の神社ふ坐ゆ。ざりして。両もゆ歇くるべ。火を燧て蕉火をふり照ら。胃の不便を
咳さつ。黒平が迹を慕ふて忍が岡まで来ければ半晌ハ火光ふ等もるさば

逃げんてそハ小馬栗ホよあらざりやと。ぼひりけられて両個の悪提いそ〳〵く
樹蔭ふ集食つ。徧五郎ホ懸悩され辛く玉の緒をとりとめ。衆教くふのりて
しる馬伴を告るゆで。黒平ふ主を呼もあくどあるいふぶひる。一度るくば二ふび
三さび這奴ひとりホ不覚をとりてとゆあるぺれり。獲七を追ざりせば一歩さりとも
きふせんや。揚ひふ揚ひて奴原ろゐと敲聞あくく罵ふべ伍平太微八ハ怒を変り。
ゆ胴さへ焦燥ゆふる。雖ろハ其効ふ由断ふべ。家の内るくぶうち倒て。矢疵ホ
索を被べけれど這奴ふ先を越くふて。廣場の突戦くさへ暗。両ふ降て自在
るるべど。剥糸屋の老官十兵衛とろいハ奴ぶ助太刀をふれもく。俳易くく
隊伍を乱。徧の魚籠の鳥。とゆひとる徧五郎をとり逃せハこの所以ふ。さり
けれども徧五郎ハ吾们を扇伏ろ。対ゆの兵まとゆふるれば耳くハ牙を隠と
べ。ものびくホ跟寇て所在ぶふるふ。ものびハ生拘て今夜の秘を要め

るんぷさくみ叱りのひそと勧解まで黒平殺せど耳くして怒をさめ。さても
ゆくも今夜の両ハ綱五郎ホゴ辛ゆり。衣さへいさく濡るふ樹の下ふ立在く。
寒さ冬さうう揺ろと乾る物あらば。野火焼つけようとらそぶせば小馬栗ハころを
引て。彼此をあさうつ。塘の下ふ稲塚を解毀し木の枝をおりて松明の
火をさし著るふ責ミかちる晩稲の稿両ふねれる生木の枝いづれも頻ふ火ハ
うつふど半晌といふく性急黒平ハ大中焦燥て牙を起しつ天うち仰ぎ星
の光りも暗るふ近しこゝて時をうつるのび被士ハいよく遠く走んれ被士と
小糸を怒ど山魅小馬栗のう共ふ引てゆらゆ。とゝ物くしげふ肱當
膓當して泥塗まふりしるふそぶちく途ふて天を羽さび必入よゆ。ゆんん。
汝達ハこの処ふて衣をうえて後ようゆよ千束村ふて俟べるぞ。さく〳〵せよ。と
いひあくまで東を指して走去まび伍平太ハ恨しげふ目送て嘆息し時とて勢よて

さべもみ。且圓塚よりハ月ハ。千餘人が大勢ふて金銭衣食よ飽足りし。
その夜ハ衣を揖て向上るとも引せぎる。半晌ふ罵られ理ふ元雖も阿容ふとうち
笑てゆる純さゆくゆで馬くぶ在ひて。非常の草木も侮る狡焼ばくれども生
憎ふ煙りのさふて燃ハせどもある腹さしと咳きろ。泥ふ塗まて肱當膓當四天を
雖て脱とて塘の上ふる樹の枝へ後さる投出まび。微ハ由共よ上帯解く。脱
捨る我衣を塘の上ふ投ようつ。池の汀の樹下ふ外月も引せどさ。剪ひて燃つ所
火を吹てようさう移よ綱五郎ハ狡七小糸ぶ往方を索てようぶも忍の岡乃
えとうゆで来よけまび雨雲て星ゆぶくしゆ。打も秋の季ふる牙ハいとうう
濡まゝうび。暁の風膚を徹て。寒死とらんべるもあらぶ。とゝ生まび池の畔ふる
樹の下ふ人ふうつゆある新て只管ふ火を吹くものあり。ゆぶ明ね夜ハ憚ふ
全ゆ。濡る衣を乾ゆとて。暗さ塘を遽く。走り下ろく樹蔭ふ出て。

許りの人と左手なる株ふ尻をやけしろば。伍平太微八はんめつれども。烏夜なれば。楚
と沼ん〻ぞ。さるかうさる遠ーんてこハ何処ろ来るひさる。明ぬふ星を戴えて。
たゝくも出るひねとを実まちて同び綱五郎ハ二人が間さぬろつ。さんがとよ人を
索ふて彼此と走りめぐふ風烈〻く骨まで直と濡されば。寒さいとで堪ら。
遥ふ塘のやとろ〻ろ。火を吹るふを見てーろが夏虫るく程どろ〻ゆろ。こハ千金
ゆゑ。といろよ伍平太ハ拳沢掻ゝ。とれもいゝ〻寒ければ人も堪らさかぐけれど天凡
この次を半時あまろ。吹どもく楚つぐと。舌うち鳴ふせば小馬栗も緒共不一舌
うち鳴し。ろ〻せば天も明るん。波治が吹草ふ異るぐ屑をつらしよろ。と嗜けば。
綱五郎ハ呵〻とうち笑ひ。ゝまで濡る枝るれば輙ゝ火もろうぐ〻ふ。ろ〻絡
静ふ走ゆ。といろよ二人ハとひかてろ。息を合して。ぱんとそ三人が口をさーとろれば品と
いふ字ふ似るる程烟を忍びて吹く程よ忽此殘と燃る火よ。おのくぐめく面を

合ー。急りろ共よ儼然とろ。没そふ魅伍平太るぐぐろ。魏堪九の綱五郎。ろひ
かけ。めく達ふと。此彼舟一牙を起ー。二人を左右よ綱五郎ハ騒ぐる気色もみく。
伍平太を丁とゆゝまへこの倫児ろ。ぐ〻ふ悪幼成ぐ。と暗き身を忍の間ろ。
鳥もゞ邦と狗を張まども。その身ハ既ろ天の網を引る漏ざる狐ろぐやあ。
助けろれろるを。下ぐひろとろひかて追放せ。遠くハ去ぐ。宮戸河原を越て
来る。今ハ〻ろ虫の火虫ふ似る青蠅ども。覚ぬせよ。とのれまけば。伍平太ハ小馬
栗と目を注て冷笑ひ。化の名のを数ぐ。管領ろ〻ひけられる。追兵を率て
秩七を舎義大罪人なる綱五郎。可惜有を失ふると罵ぐ。小馬栗もろけを
ふぐ。と肩を攘し。ゆる比其崎ゆて左ろ〻ゆ。ぐ〻ふを追ひと死撃倒さんとろひ〻ぐど。
禍ふゆふ乞児ふ棒撃ろけて通ぐつれあゞる。火燵弁慶門の狗。小馬栗ぐ本事を
ろゝぐど。と呼ざくも情ー。と綱五郎ハ微八を信と人ゆろて。現面拒ハ怒る黒平ぐ

豊島の郡の住る綱五郎
二児を殺す

つな五郎

鞍計の悪掘日未ろう汝が所在を彼此と索ろう。一文字の陣羽織を伝処へ隠し
る黒平ハ何処まある。首伏せよとのハせもあくと。伍平太微八ゝ声をあり立のうとれが
さあぐうる。我言を吐く首顧ゆ。管領のみを待んろう。刃を受ると左右ろう。巨
刀を内ー砕ぶんとされば。綱五郎ハ物ゝしや。と刃を反りて左よ右よろん潜り。刀を見と
抜あハ。そ二人を敬ゆを些も撓ど野火を燭お奮撃突戦秘術を尽ると大刀風イ。
伍平太微八ゝうち靡き遠よ刃をうち落されてのろ共よ度を失ひ。塘のうえ
迯登る。微八ゝ臀をあさうう砕られて滾落くと。転墮沈へ火と沈つ浮つ泥よ喘く
るも生ど。伍平太ハこの光景ふ驚れあそれて迯んとする。綱五郎ハ跳かゝるく。
右の肩尖丁と砕る砕られく苦と叫びもあくど筋斗をゆゝて沈ろへ真逆さまホ
陷つ。這あぐんとする行ふ。綱五郎ハ刀を引提て水中ふろう立よこの池汀清い浅
そ僅よ膝を浸ぜども泥ふろうして足蹈めど枯残る荷葉よ携て喘ぐ。悪掘ホい

蛇よ逐く蛙のエく脱まがるしとどひーろう。戎ゝ綱五郎が足を抱留。或ハ背
ろうまぐを著て。引倒さんとする。知をふろうれども深曠り。除ゝ泥をかけく
切る。蹴撃丸が刃の光ろふ。微八ゝ腕をうち落ま。伍平太が首を飛ーて。軀ゆ
共よ沈をけをかろうる。打翠巾ふ面を包て。一個の従者を倶ーろう武士塘を
西へ過ると。挑燈を従者が両夜の神よ掩せ主従樹蔭よ停立て。律の乱作
を楚と闕窺。同今綱五郎が両個の悪掘を伏せろ紙ゝ定て。遽く後者ふ
密殺つ。木の枝よ投掛る。假捕ゆの弐衣を残アろう。取りと。西を指ぐど赴
ろう。ろうれども綱五郎ハ夏急るのれが外同せど。喘紀夜いまぐ。ぬれが塘よんるハ
ありしをろうど血刀を引提てゆをう岸よのぼうつ。忽地さろうゆう。彼微八を生
拘て。這奴ゆうく責問つ。黒平ど所在をろうべく。陣羽織をろう復とろうとがい
こふありろるの紙早アそ微八を殺せゝ怒よ。あ巴。過失ろうよろうれとを

ちてくりとひとりこちつゝうら表の。裏うゝ刀を押戻へば。水島さらぐ明六の。
薄あり物をとゝある。十兵衛ハ綱五郎が[illegible]ちもあれど跡を
慕ひて彼此と索まつ。綱五郎が難の内より。落る狭七が遺書拾ひあげて
桃燈を左手のうへ。さゝ〳〵よして。紙ふもゝる鮮血と鷲紙。雛媒丸主。神原と読
声小人ありくりと綱五郎ハ信と人のうて面をあハ。そハ阿義あるぞも。私子
うぶぞや。と問ひつ。問まつ。推隠と刀と共ゝ十兵衛ハ桃燈弗と滅と物うゝ。野千
玉の夜も不のくゝ。明る秋ひとびくくりうゝべ。

大川豊

第十三段

神原夫妻葉川ゝ隠る
三箇醉客ト居を祝ゝ

武蔵野ハ高萩が原と呼つれど。言紫の花野咲百ひ。倦ぬるぐあも可の秋ゝ。
いとで秋の春ぐま末の雫も後通ゝ小張屋る砧川。借屋背戸屋の住居ゝ。